

本議事録は、発言者全員の確認をとったものではありません。

プレス会見概要
(統合本部合同記者会見)

日時：平成23年5月16日(月)16:30～19:13

場所：東京電力株式会社本店3階記者会見室

対応：細野内閣総理大臣補佐官、西山審議官(原子力安全・保安院)、坪井審議官(文部科学省)、加藤審議官(原子力安全委員会) 松本立地本部長代理(東京電力株式会社)

(説明)

<細野補佐官挨拶・趣旨説明>

本日も統合対策室の記者会見にお運び頂きありがとうございます。
またご覧いただいている皆さんにも心より感謝申し上げます。
今日定例で出しているもの以外で皆さんに、ご報告させていただきます資料は2種類ございます。

先ず一つは文科省から発表します放射線量等分布マップ、いわゆる汚染マップについてでございます。

これはデータが整いましてから、月に2回程度はお知らせをするというごとでお約束をしております。
その非常に重要な情報でございますので、後ほど文部科学省の方からご説明させていただきますと思います。

もう一件は東京電力の方から発表していただくことになりましたけれども、保安院に対する報告事項というのが本日午後の方で5件ございまして、そのうちの3件について具体的な報告の本身について今日は発表することになっております。

その報告については、電気設備の被害状況、外部電源の復旧状況等に対するものがひとつ、そしてその外部電源の信頼性、これは事故後ということございませすがそれに関するものが1件、そして最後に地震の観測記録の分析に関わることが1件でございます。

残り2件あるのですが、それはかなり細かいパラメータに関しての情報というところでございますので、統合会見が終わった後、個別に東京電力の方から皆さんへご説明をということになっておりますので、この会見のなかでは先ほど私が例示を致しました3件についてのご質問を皆さんからお受けするとということにしたいと思いますので、その点は非ご了承いただければと思います

す。
私からは以上でございます。

<環境モニタリング>

○東電から

・空気中、海水中の分析結果について報告。グラフ核種分析結果、本日から合計値というところで記載の変更、これまで粒子状と気体でわけていた。ヨウ素について0.1倍くらい。
・福島第一海水、1.1から1.7倍程度。計時変化、グラフで確認いただけるとおり。

○文科省から

・4月22日、環境モニタリング強化計画でこのようなマップ作っていく、5月11日時点のもので更新したもの。線量マップ、マイクロSv/hでこのような等高線が引ける。20km以内について、データがかなり得られてきており、川内村の東側に高い地点、このへん山のように、シルエットが広がってきている。

・予測についても、20km圏内が入った分のちがいはあるが、概ね前回と同様。

・4月26日に発表したものから大きな変化なし。1か月に2回ほどのペースで更新していきたい。

・空間線量、20km圏内、新しいものが加わっている。

5月12日13日に測った、56の学校について、今回の測定で、校庭の使用を超えた学校はなかった。これについても原安委に報告する。

○原安委

・空間線量率、大きな変化なし。福島第一原子力発電所20km圏内、東電の測定結果、限度値が越えた箇所が認められる。
・文科省精緻化されてきている。

<福島第一原子力発電所の状況>

○東電から

・タービン建屋地下たまり水の移送継続、3号機について明日には移送を開始。

・プールへの放水、3号プール注水予定。

・1、2、3号機圧力容器中に注水継続。

・取水口付近の海水高線量の核種分析の結果について、3号機の取水口付近か

ら漏水で一時的に上昇したが拡散が進んでいる。

<保安院に提出した報告書>

○東電から（「原子力発電所等の外部電源の信頼性の確保に関する報告書の経済産業省原子力安全・保安院への提出について」）

- ・2種類ある。
- ・外部電源の信頼性確保の報告書について、東通、六か所で外部電源の喪失があり、確認するよう指示があったもの。4点ある。
 - ・電源供給信頼性の更なる信頼性の検討、
 - ・各号機の信頼性向上に資するよう、複数の電源線の確保
 - ・送電鉄塔の耐震性、
 - ・開閉所の津波対策、原子炉建屋の水密化
- ・評価対象は柏崎刈羽、東海第二、核燃料サイクル工学研究所（東海再処理施設）。
- ・柏崎刈羽と東海原子力発電所は、送電線に問題はない。核燃料サイクル工学研究所は一定の時間がかかる溜め、より確実な方策を検討する。
- ・電源線鉄塔の健全性について、すでに確認が行われている。その他支持塔子、基礎に弱点がないか調べている。東北電力で塔子の割れが見つかっているの、耐震性の高い塔子に切り替えていく。鉄塔は周りの土砂崩れで鉄塔が倒れた事例。各送電線の基礎に地盤が緩いところがないか調査している。

○保安院からコメント

- ・東電のみならず、9電力、電源開発、原燃、JAEAにも指示している。HPに掲載する。正式に提出受けた。保安院立入検査等確認して今後報告する。

(同会) プラントデータUSBで用意。入口のところ。並行して質疑進める。

17:00

(質疑)

Q：内部被ばくに対する検討状況、ホールボディをどれだけうけているか、協力と社員で違うのか、3か月に1回とのことだが、回数増やすとか予定はあるのか。

A：（東電）小名浜、福島第二に設置、強化することになる。社員と協力会社には差はない。3か月に1回、増やす予定。

Q：受けてない人がまだいるのか。

A：（東電）確認させて、100mmsvを超えている人優先的にやっている。

Q：まだ内部被ばく測定していない方は不安だと考える。今の小名浜、福島第二だけで十分か見解を。

A：（保安院）機械の入手可能性等制約あるとおもいますが、現地で不安な中作業されている、ご希望に沿うよう配慮してみたい。

A：（細野補佐官）：明日、政府側もロードマップを発表するのですが、その中で、特に発電所の中で働いている方々の健康や安全の問題については、全面的に後押しをすることを書きます。

そしてその中でホールボディカウンタについても事業者を支援するという形で書いてございます。

そういった形で東京電力を支援するという形でやれると、国がある程度直接関与できる部分と色んな所があると思いますので、このロードマップの方針に従って出来る限りの見通しというのを、やれることをやっていくという姿勢を維持していきたいと思えます。

Q：細野さんに対して。計器不良のプラント関係パラメータ、公表要望した検討状況。火力配管通して入れるとか

A：（細野補佐官）ご指摘を頂いた点も含めて、パラメータの中でですね信頼性がおけるものとおけないものを峻別する作業をずっと東京電力の方で進めて頂いて参りました。

今日はそれを発表できるところです、この後発表することになるうかと思えます。

今、佐藤さんが仰っているのはその信頼できないものも出来るだけ公表せよということなんですけれども、そこはですね、果たしてどれ位の意味があるのかということを含めて、ちょっと信頼できないものも公表せよと言っているよう意志でございますか。ちょっと教えていただきたい。

Q：情報公開の観点から申し上げている。信頼できるかどうかは受け手で判断

できればよいと思う。

A：(細野補佐官)信頼性のない情報は混乱する。

Q：とりえず、すべて出していたいただきたいのがこちらの要望。

A：内視鏡適用できないかとのことだが、検討の段階にはいっていない、圧力容器を開けられるのかということも検討していく必要がある。

Q：配管内に入れるのは。

A：中に高濃度の放射性物質があり、対応は慎重にならざるを得ない。

Q：班目委員長、1、2、3号機のメルトダウンに言及。保安院の1、2、3号機について認識如何。

A：(保安院)先日来1号機について、圧力容器内の水位が頂部5m下というデータ、水量あげてパラメータ、その他踏まえて結論をだしたい。2、3号機は、ある程度のペレットは溶けていると思うがそれ以上のことは申し上げられない。

Q：班目委員長が、2号機の高濃度水を発見した時点で、メルトダウンがある。と保安院へ助言していたと発言。統合本部としてどういう受け止めだったか。
A：(細野補佐官)班目委員長がどうい言う方をされたのか、私も正確に存じ上げないので、それについての正確な事実が分からないので、コメントは差し控えたいと思いますけれども、メルトダウンというものをどうゆうふうに定義するのかということについて、若干、概念の正確な確定がなされなかつた時期があるというふうに思います。

私も含めて、この問題に関わっている人間は、かなりの時間水が入っていません。なかつたことは全員承知をしておりますので、燃料が溶融していることそのものは認めていたわけですね。

それが何時間くらい水が入っていなかったのかという時間の確定が、まあこれが実際になかなか難しく、1号機の場合には14時間9分という状況で、これだけ長い時間、水が入らなかったのだから、炉心そのものが溶融しているだろうと、そういう結論に達した訳です。

ですから、班目委員長がメルトダウンだよという言い方をされたかどうか、私は正確に記憶しておりません。

燃料が溶融しているということについては、おそらく仰ったんだと思いますので、その認識は共有されていただろうと思います。

Q：意見の相違はなかつたか。

A：(原安委)事実関係の説明。3月28日、台20かい委員会開いて、2号機地下一階の滞留水についてという助言。つまり水は数十倍であり、一部溶融した燃料と接触した水が何らかの原因で流出、一部燃料が溶融したという事実をここで認めている。

A：(細野補佐官)今のような認識は全く共有されていたと思います。

燃料溶融そのものは認めていて、どの程度かということと色々な解釈があり得るのではないですかというふうなそれぞれが考えていたということです。それで、水がはつきりああいう水位だと分かって、これは炉心溶融そのものだ、それは安全委員会の定義によればメルトダウンということになったわけですね。

Q：今日の予算委員会、菅総理が明日の見直し案について、時間的展望変えないままと発言されたが、その根拠如何。

A：(細野)明日が発表ですので、明日を待っていたければ大変辛いのですが、要すけれども、菅総理の認識も恐らくここは重なっていると思うのですが、要するに、この道筋のなかで大事なものは、冷却がどの程度進むかなんですね。

そういう意味では、炉心は確かに溶融はしてしまいましたけれども、冷却そのものはかなり順調に進んでまして、例えば、1号機でいうならば、代表的なパラメータで100℃前後ということ、もう後一步で冷温停止状態といつてもいいような所まで来ているんですね。

ただ、安定した冷却状態になっているかといえ、むしろ滞留水が出ていくという状況ですので、安定的な冷却の仕組みとはいえないわけですね。

ですから、これからきちっとその滞留水を戻すという冷却の手段を確立することが出来れば、冷却そのものが遅れているわけではありせんので、ステップ1、ステップ2という、そういう仮定そのものは目撃通り出来るのではないかと、そういう認識でございます。

Q：保安院に質問。福島第一と第二の分析結果の説明がなかつたが。

A：東電がコピーとっているもので、松本さんの説明のあとでと思っていた。3月11日の地震の際、か、ほとんどの周期帯で、基準地震動を下回っていたが、一部、応答スペクトル、3割程度超過。Ssチエックした時よりも大き

く揺らされており、そこに固有の周期をもっている設備の確認指示。東電から報告がある。固有の周期で、設備が基準としたものより上のものを受けているもの、設備は如何にどう影響受けたか報告するよう指示したものの。(司会) さきほど、3つの報告のうち、コピーが間に合わない2つのうちのひとつ。後ほど、東電から報告がある。

Q：先ほどの班目委員長の件、質問メルトダウン認めてないと、1号機確実と言及、そのあと、2、3も自ら言及された。メルトダウンの定義の紙を見ながら質問したので言葉の問題でない。東電のメルトダウンと提出された資料は原安委に提出されているのか。

A：評価がまだ、なるべく正確な聞き取り、先週末には評価された解析結果もあわせて判断。

Q：保安院から報告がないことに不満を持たれている。このタイムラグを縮める必要があると思うが、細野補佐官認識如何。

A：(細野補佐官) 統合本部の中には安全委員会の事務局もいるんですね、ここに、日々色々なデータをやり取りしていますので、私の認識では、相当、迅速にデータは相互にやり取りできているのではないかと、思うふうになっています。

委員長がそういう思いを持っておられるということがあれば、そういうこととがないようにしっかりと確認する必要があると思います。

Q：世界の英知、委員会も入っているのでもよろしくお願ひしたい。速記録はのこされているが、記者会見の速記録を残すつもりはないのか。

A：(原安委) 今の段階やってない。検討したい。委員長が言っているのは情報というより、保安院の見解を求めているということ。

Q：東電に中性子モニターはきているのか。細野さん、地震の発生確率、浜岡だけ高い、その他公開について検討とのことだったが。

A：1から3現在作動していない。

A：(細野補佐官) ご要望頂いた日の夜、経済産業省の方で公開しましたので、その次の日の会見で皆さんにもお配りをしました。ですので、今日お戻り頂ければ、帰りにお持ちいただいただけでも構いません。

Q：3号機の炉心について、午前中の会見でワーストのケース、かなり露出して、1号機と同じ可能性あるといった。ワーストのケース、工程表の見直し、どの程度まで考えて行うのか。

A：1号機で、きちんと水位が測れてなかった。この事象は、当然2、3もあると考えていて、現在得られている数値より実際の水位は低いと考えている。燃料が炉心指示板の下に落下していることも考えられる。ただ冷却は出来ているので、1号機同様問題ないと思っている。冷却する位置、場所が違うだけで、やることに違いはないのではないかと考えている。

A：(細野補佐官) あの1号機についてですね、炉心の完全な溶融というのをなかなか判定できなかったという反省はしなければならぬと思います。したがって、2号機3号機については、そういうことがあり得るという前提で私も考えたいと思います。どれくらいの時間が水が張らなかつたことについて、ここ数日整理をしているんですが、1号機が14時間9分、2号機が6時間29分、3号機が6時間43分と見ております。したがって、1号機と比較すると、2号機3号機は、注入できなかった時間が短いわけですが、6時間半前後と、この時間自体は、決して短くはありませんので、最悪炉心が溶融している可能性は見ておかなければならないと思います。ことから問題なのは、さっき松本さんが言われた、果たして冷却そのものがうまくいっているのか、ということが一つあるわけですね。ここについては、問題がある程度見えておりますので、そういった意味では冷却そのものは、1号機をはじめとしてうまくいっている、もう一つの懸念事項はですね、これは私個人の懸念事項ですけれども、この燃料が圧力容器の中に留まっているのか、もしくは圧力容器の下の格納容器のまで行っているのか、この点にあるわけです。この点についても今のところ、いろんなパラメータを見ている限りですね、圧力容器の方の温度がかなり高くなっておりますので、相当部分は、この圧力容器の中に留まって燃料があるだろうと、いうふうには見ております。あと、格納容器に落ちていた場合には、どういう対応がありうるのかというふうなことは、これは程度の問題はありますけれども、多少は落ちていけると想定されますけれども、そこも視野に入れて様々な対応を考えていかなければならぬのではないかと、思うふうに思います。

Q：1号機水管の見直し工程変わった。2、3号機シミュレーションしていると思うが、下に燃料が漏れていることまで考えて、工程表の見直しは進んでいるという認識でよいのか

A：(細野補佐官) ご質問の中身にお答えするとすれば、まさにそういう工程表にすべく最後の準備をしている。したがって、理想的な冷却の仕組みというものは、もともと様々考えていたわけでございますけれども、それが実現できない場合には、最悪の場合でも、これなら冷却できるという仕組みをしっかりと言えども、皆さんへお示しできるような準備をしたいと思っております。

Q：放射能漏れについて懸念する必要があるか。

A：建屋が崩壊しており、放出は少なからず継続、モニタリング結果数値は減ってきている。先ず安定的冷却、たまり水の処理、原子炉建屋全体をカバーで覆う措置を進めていきたい。

Q：タービンのたまり水、1号機41万Bq/ccについて。

A：漏出ルートは分かっているが、濃度から原子炉由来と言えらる。

Q：46万Bq/ccが3号機でも。

A：漏出ルートは分かっているが、濃度から原子炉由来と言えらる。

Q：1号機、3号機、格納容器から外に水が漏れていることが前提と。

A：そう。

Q：1号機の非常用復水器が動いていなかったのか、3月11日12日未明まで動いていたと断定的に発表していたが、根拠がなかったということ。訂正されるべきでないか。

A：今後、こういった情報が提供されたか確認し訂正したい。

Q：HPIに載っている。すぐわかる。

A：早速対応する。1・2・3号機とも、なんらかの影響ある。2号機で大きな音、2号機は大きいということで最初のロードマップを作成したという経緯がある。

Q：復水器について、機能しなかったという前提でシミュレーションしていたのだと思うが、バッテリーが何故動かなかったのか。水につかたか聞いているがもう少し詳細に。

A：午前中の会見、電源の構成について説明しなかった。資料配布終わったら、

電源設備の復旧状況で発表させていただく。

Q：津波の対策。

A：福島第一のケース、津波によって海水が浸入で、今後の対策、水密か、防潮堤を建設していくこととしている。

Q：今回の放射線量の分布マップ、伊達市の避難区域外で線量が21.7と、20mSvを超えている。11日と26日2回超えていて、境界外で市全体に広がっていないとこのことで計画地域にしない。今回も20を超えたがどのように考えているのか。また、細野さん、3号機の現状認識で、どういった御懸念か教えて。

A：伊達市そのエリアについては、本日の文科省の資料のうち、表3/4、ポイントを増やして測定している。よく推移をみたい。木曜日の委員会で委員が審議を予定。

A：(細野補佐官) 3号機ですけれども、温度が安定しない、若しくは、上がり気味だったもんですから、それで大変強い懸念を持っておりました。

この間ですね、元もと消火系で入れた水を給水系に切り換えるという作業をずっとやってきました。本当に安定的に水が入っているのかについての心配をしておったのですね。

さらには水が入っているとすれば、中の燃料が何らかの、それこそおかしな動きをしているのではないかと懸念を色々な方から私聞いておりましたので心配をしておりました。

幸いですね、給水のこのやり方色々検討をした結果と致しまして、3号機の中の燃料の温度が、これは昨日からですか、非常に大きく下がりましたので、昨日の朝私が申し上げていたような心配はとりあえず無くなったかというふうにも思っております。

Q：伊達市の線量についてどのような感じか。

A：(細野) かなりの時間、永遠に亘ってですね20を、まあ積算線量の線量の推定ということですが、超えてきておりますので、非常にこの数値は心配だというふうにも思います。

従って、安全委員会で検討していただけたということでございますので、その判断をしっかりと私も見守りたいと思います。

Q：伊達市から不安の声があがっている。見直しについてどのような見解かあらためて原安委・文科省からいただきたい。

A：（原安委）これまでの推移をみまもりたい。

A：（文科省）官房長官が見解述べられている。モニタリングしかりやって経過をみるようにとのこと。周囲のモニタリングを増やしている。4/4、D4523というところ。モニタリングは強化していきたい。区域の判定は、対策本部で決定される。

ここで東電から資料を配布している。これについて説明

<地震はについて、福島第一、第二の>

○東電から

・最大加速度、時刻歴、スペクトルがまとまったので報告。観測データ、日本地震工学会から公開させていただく。

・2号機、東西方向が最大、Ss、438ガル、単純に加速度で比較したものが、周波数について分析を行ってきた。

・原子炉建屋基礎上の応答スペクトル、福島第一、第二とも基準地震動の内側だが、0.2から0.5の周期のところに、ピークが見られ、基準地震動を上回っているところが見られる。建屋構造物の強化するよう保安院から指示いただいている。

・一部のデータ欠則、53か所の地震計、29か所でデータが得られている。第2、43か所データが得られている。1F7か所、2F11箇所、130から150秒以降採れていない。これは地震計のソフトウェアにバグあり、長期間地震動が動く場合地震動取りきれなかった、社内展開、他の電力に情報提供、取り替え修理をお願いしている。

○保安院から

・一部分、基準地震動を上回るところ、配管設備についてさらに確認するよう指示する予定。

<電気設備の被害状況、応急措置による復旧させた報告>

○東電から

・160条3項の報告聴取。

・別紙1という形で、被害の結果、電気を切って安全に遮断できたところ、ねずみ色でのハッチングは津波をかぶったところ、赤いところで破損があったところ。

・別紙4の夜ノ森線に関しては、鉄塔そのものが倒壊したのでなく、盛り土が

かかって倒れてしまった。他に同様なところがないか点検。

・別紙6ディーゼル発電機、配電盤、常用パワーセクター、各電源設備が、地震後どういった状態だったか、ピシンの箇所、津波で使用不可になったか、黄色使用可能。今後原因究明を進めていきたい。

○保安院

・原因究明、線量の問題、調査計画、1週間23日までに保安院に報告してもらいたい。

・14時提出があった。明日には公開したい。

・分析結果を踏まえた、評価結果を23日までに提出するよう指示している。我々独自にも解析して、皆様に報告したい。

Q：地震の揺れについて、4月1日の暫定値とくらべると同じ。今回のこの意味合いは。データ取れなかったところ、7か所と11か所になぜなかったのか

A：暫定値については、先ほど御説明したような、時刻歴の解析等がまだだった。今回が最終的な確定値と御理解いただきたい。550ガルという数字は変わっていない。データの欠損について、地震観測記録、地震計記録を終了する判定のロジック、機動レベル下回って止まった。本来次の揺れを感じると再起動するはずだが、再起動できなかったのが一点目の不具合、中断したとしても、別のファイルで記録を再開するはずだったが、そのソフトウェアに不具合、130秒から150秒の間に記録ができなかった。一部記録で来ていたものはこういうロジックがない記録様式だったとのこと。柏崎の後に設置した。もともと設置していたものは、こういったアルゴリズムがなかった。

Q：柏崎の後に付けたものがだめだったのか。

A：改良したつもりだったが、判定ロジックに一部不具合があったということ。

Q：他の全国の原因へは指示するのか。

A：確認したい。

Q：細野補佐官へ。圧力容器から格納容器へ燃料が落ちているとのことだった

が、根拠をおもなのか。落ちている場合どんな可能性、圧力容器に大きな穴か、貫通部からのものか。

A：(細野補佐官) 私は原子力の専門家ではありませんが、相当数の専門家から意見を聞くことは出来ておりまして、そういう専門家の中に圧力容器から格納容器に落ちている動きがあるのではないかとというご意見の方がいらっしやいますので、そういう可能性を見ておかなければならないのではないかと思います。ということで申し上げました。

ただ、その専門家の多くは今ご指摘のところというならば後者のケースです。つまり、制御棒の穴と申しますか隙間が空いているわけですから、制御棒の入れる、そういうところからドドと落ちていくというか、まあ何らかの形で落ちていて、その一部が格納容器にあるのではないかと、そういう指摘が多いと承知をしております。

それともう一つの傍証としては、原子炉の圧力容器の中の温度が高いですから、そちらに相当部分の燃料が残っているということでは推察をしているという、そういう全体としての色んな情報から、そういう可能性を見ておかなければならないのではないかと、というふうにご考えております。

Q：0.1から0.3秒で超過とのこと、ここに周期をもつ重要な配管設備は何かあるのか。

A：直接この周期にびったりくるものはないが、0.1秒のところは圧力容器、0.2主蒸気配管があるが、スペクトルの分析、構造物の評価できちんと対応していきたい。

Q：工程表政府からあした出されるとのこと。道筋以外に工程表だすとのことだが。

A：(細野補佐官) 4月17日は東京電力が出して、政府としてはそれを承認したというか、認めたと、後押しをするという姿勢であつたわけですね。

そういった意味では道筋という意味では、東京電力が出したというこれに一つ限定されるわけです。

今回は、ひと月経ちましたので、東京電力が果たすべき役割と、政府が果たすべき役割というのはより明確になってきたと考えておりまして、政府の側からは東京電力がやることをどの様な形でバックアップをしたり、場合によっては主体的に役割を果たすのかということについて、一定の道筋を示す必要があるのだらうとロードマップを示す必要があるのだらうとありますね。

その他にも、例えば避難であるとか、モニタリングであるとか、更には検証なども含めてですね、様々な原子力発電所の事故に由来する作業をやっ

ておりますので、そういったことについてもある程度ロードマップを示した方がいだろうということで、様々な項目が政府のロードマップの中にも入るといふことになります。

Q：補償も含まれるのか。

A：(細野補佐官) 原災本部として出します、本部として出しますので、本部が取り組んでいることが幅広くそのロードマップの中に含まれることになるだろうと思います。

Q：ロードマップが一つでその中の項目が多岐にわたると。

A：(細野補佐官) 政府のロードマップは一つです。その中の項目が多岐に渡るといふことです。

Q：多岐に亘るのは何項目くらいになるのか。

A：(細野補佐官) 項目数をどうゆうふうにかウントするかによって、数は随分変わりますので、ただ本部でやっていることというのは、実に多岐に渡りますので、かなりの項目がそこには入ることになると思います。

Q：午前中の東電の会見で、バックチェックについて。開放基盤はおさまっているが、建屋の基礎盤に持っていくときに問題があつたのか。それについてなにか水平展開するつもりはあるのか、0.1から0.3超えているように見えるが、どう考えるのか。記録採れていないところに、たかいピークとかないのか確認されているのか。

A：新指針に基づく耐震バックチェック、21年3月31日、5号を代表して21年6月19日、残りの号機、安全上重要な設備の中間報告が出されていく。スペクトル見る限り、Ssの範囲内。一部の周波数について基準地震動を上回る場所がある。建屋の基礎マットのところ、時刻歴等就意実行する、一部欠落について、他の観測記録と照合、異常なピークがあつて、重要な欠落がないか評価していきたい。

A：(保安院) この東電からの報告をもって、直ぐに他の水平は決定していない。よく他も確認してからになる。

Q：図の点について。

A：北地点、南実際の開放基盤表面ということでない。

Q：各号機安全確認されているには何号機と何号機か。

A：確認している。

5号機の中間報告は終わっている。

Q：1号機はやってないのか。

A：保安委で終わったものから順に。

Q：東京都の健康安全研究センターのHHPに原子力安全委員会が、年間100mSv以下であれば、がんになることない、健康に影響ないことあり、自治体でそういうことを引用、政府として確認しているか。福島言ったのは公務か。武藤副社長、松本さんにバトンタッチ、役員ある頻度でと聞いていたが、ここ1ヶ月半の間、1回か2回しか出てきてきてない、なし崩し的に感じられる。統合本部の会見として改善がされるのか。

A：(細野補佐官) まず、一点目ですが、私自身はそういったHPがいくつかのところで、あるということについては、承知をしております。確認をしたいと思います。

100mSv以下であれば、多分安全だというふうには、安全委員会も言っているんだらうと思います。言っているのは100mSv以下については、データがなかなか無くてわからないというのが、これが正確なところではないかというふうに、私自身は承知をしています。したがって、出来るだけ正確な記述をしていただけるといいかと思いますが、しっかりチェックをした上で、出来るだけいいように承知をしたいと思います。確認をしてみます。2点目ですが、東京電力の福島第一原子力発電所に行ったのは、これはもちろん公務でございます。3点目ですが、東京電力の役員がもって会見に出てくるべきだというご意見ですが、明日はですね、道筋の発表ですので、これは当然ですが、すべき役員の方に出てきていただきたいというふうにも思っております。そういう方向になるだらうと思っております。それからどれくらいの頻度で出てくるのかについては、ちょっと私もですね話をしてみたいとは思いますが、ただ、松本さんが非常に責任をもって、全体のことを把握した上で答えていますので、役員では無いですよね、役員では無いと言ったことですが、松本さんがまさに東電を代表して発言をしているという意味では、そこは十分な役割を果たしておられるのではないかと思います。ただ、繰り返しになります、東京電力の役員のみならず、松本さんがそれこそきちっと説明をする機会はある程度確保すべきだというふうに思っていますので、話をしてみたいと思います。

Q：プラント関係松本さんで十分。賠償関係その他で会見持たれていない。検討いただきたい。福島同行された方はどなたか。公務であれば問題ないと思

うが

A：(細野補佐官)私と同行したのは秘書官でございますので、まさに仕事で一緒にやっているということでございます。

Q：アメリカの方が一緒にいかれたのは、どなただったのでしょうか

A：(細野補佐官) その件については、行く前の日だったかと思うんですが、ここでご説明申し上げたんですけれども、米国の方の中には数多く、長らくこの日本に滞在して、ご貢献をいただいた方がいらっしゃいます。その中の一人でございます。名前については、米側と話をして、固有な名詞は避けるということにしましたので、公表は控えさせていただきますと思います。

Q：その方も公務ということではよろしいでしょうか

A：(細野補佐官) もちろんプライベートで行けるようなところではありませんので。

Q：であれば、名前は結構なんですが、どこの部署のどういった方かを教えていただければと思うんですが、あの要するに、この時期工程表が発表される直前ということもあり、何らかの影響がですね、要するにその方がどうい風プラントを見られていたのか、そういう評価も含めて、可能であれば、お出しただければと思うんですが。

A：(細野補佐官) はい、この件は日本政府の方ではございませんので、しっかり、しかるべく確認をした上でお答えしたいと思います。

A：(安全委員会) 100mSvの件で補足。4月10日の原子力安全委員会で、100mSv、確率的影響で、抜本的影響は起こらないといったが、誤解を招くということで発言訂正されている。

Q：今回発表している、最大の観測値、3プラントで超えているが、応答スペクトルの解析、上回っているところの機器に対する影響はあるのか。これら

果で黒塗りがあるかどうか。

A：(東電) 基準地震動、中間報告時からかわっていない。これに対する評価を中間報告でも行ってきた。一部スペクトルが上回っている、おおいところ3割程度。柏崎の例で、大きな影響受けてないと思うが、今後確認。現場に近づけない、計算でシミュレーション、建物揺れを模擬し、実際の機器にどう伝わるか、柏崎の手法と同じ。鉄塔自身は地震で倒れてないが、盛土は地震によるもの、押し流されてきて、土台が深された。広い意味では地震で鉄塔が倒れたということ。黒塗りについては、配電図が描かれているところ、配電図、外部に公開されると、テロの面で弱いところをはっきり分かる。従来から非公開にしている。

Q：中間報告で想定していたものを超えている。観測値からを予測できなかつたのか。鉄塔の件、御説明のことだと、鉄塔立てるときの指針でそのようなところに立ててはいけないうか無いか。

A：電気の指針にそのようなものがないか調べる。基準地震動と今回の地震動、400キロという広い地域、滑り量も20m以上、はるかに大きな地震が発生した。

Q：中間報告を作る前の段階で、今回のようなものは活断層の分析。

A：想定するの難しかったと考えている。

<補佐官退出>

Q：地震の件、3号機応答スペクトル、周期0.3付近でピークがある。図の4、0.1から0.2の間、Ssを上回ったところ、安全な機器設備がある。主蒸気配管等あることだが、0.15の所にどのような設備があるのか。基準地震動1から3とあるが、もつとも大きな揺れを建屋に与えるのは1でよいか。

A：5ページのところの、ピークがたっているところの加速度、今の段階で手元がない。デジタルデータひもとく必要がある。周波数データと機器の関係について、号機によって値に違いがある。たとえば3、0.15圧力容器、0.4に原子炉建屋、スペクトルに対する機器の健全性保安院指示のとおり今後評価。Ssの1から3のうち、Ssの2が最も強い地震動と思う。

Q：ピークの値は調べられるのでは。

A：さきほどの開放基盤で600、450。

Q：Ssを上回っていることについてどう受けとめているか。

A：今回一部超えているところ、東電の評価、Ssの妥当性は今後吟味してみたい。

Q：他のサイトも。

A：(保安院) 予断できない。Ssの決め方問題あれば、水平展開、いまそこは予断を持ってない。

Q：3割程度超える。他の発電所で断言出来ないと不安

A：ここが基準で超えたとなると不安になるというのは間違いない。これまでの知見を踏まえて決定してきているもの。今回どう考えるかよく考えないと、単にその事象だけとらえて見直すというものでない。自然のもたらす、想像できないものとのバランスをどう考えるか。

Q：指針に基づきとのことだが原安委は。

A：平成18年にできてバックチェック進められてきた。枠組みを定義、地質調査、過去の地震の記録でやってもらう。まず保安院の専門家集めて厳しく吟味し、原安委でも特別委員会でも評価してきた。最新の知見でやってきたが、結果としてそれを超えることになった。なぜ福島で超えたのかという吟味やっってもらって、ほかに適用するかよく検討してほしいのと、すぐ壊れるという性質のものでなくて、超えているような健全性評価も今後よく何が必要か考えていく必要がある。

Q：さきほどの地震データ、130秒から150秒、記録されてない。

A：データとして250秒までとるというものでなくて、起動レベルを下回ったところで切れている。メモリの上限で、どれくらいまで取れるか決まってくる。

Q：揺れている途中でできれしまったのは事実。

A：200秒まで波は小さいが揺れていると。

Q：これほど長い揺れはソフトウェアでそういっていざされていなかったのか。

A：柏崎を踏まえて取れるようにしましたが、停止レベルと機動レベルをいったりきたりして、うまく取れなかった。

Q：アルゴリズムに間違いがあった。誤って停止したのではないということか
A：そういうこと。

Q：1号機2、3で冷却できてなかった時間、さきほど細野補佐官おっしゃっていたが、それぞれ何時から何時か。それによって早い段階で、冷却できなくなっている時間をどう評価できるのか。明日の工程表の見直しの発表、この会見でやるのか、別建てで東電でやるのか。

A：(東電)細野補佐官がどういうデータでおっしゃられたのか根拠がわからな
い。確認させていただきたい

(司会)今その件含めてうちあわせをしているところ。

Q：保安院の会見で、13日、西門中性子線、3号機ホウ酸注入と関係あるの
かという話があったが、東電の認識遺憾。

A：(東電)データを確認する。

Q：2000mSv記録した件、福島第一での可搬型の上限は。
A：上限5000mSv。

Q：燃料解析行われてデータがでてきたが、こういう解析は事故が起こると同
時にやって、データと多角的な比較しながら事故対策やっていくことはあた
りまえなこと、これをやってこなかった東電に対し原安委、保安院はどう考
えているのか。細野補佐官、あと一歩で冷温停止といったがデータで裏付け
られているのか。先ほど原安委、放射能量比例的な関係、分かなり難い、IC
RPに基づいて見解出されているのであれば、ここにこう書かれているので
こういう意味ときちんと説明していただいて誤解を生まないように情報を提
供していただきたい。

A：(保安院)当時、データが分からない状態で、原子力の関係者であればこれ
までの蓄積で、どのくらいで炉心が溶融するか、考えて対応してきた。1号
機がいちばん低くなってきていて二桁になってきてきている。もう少し下がれば

冷温停止と言えと思う。

A：(原安委)班目委員長等は、非常用炉心冷却装置が働かない、交流電源喪失
で、シビアアクシデントの手続ききちんとやるよう申し上げてきた。何をも
って今回、冷温停止かと今日の会見でも言及しなかった。少し議論が必要だと
委員長言っていた。ICRP配布して今後そうさせていきたい。

Q：あと一歩で、とは根拠を持って言っていると思うが、細野さんに提供され
ているデータがあると思うので教えてほしい。なにがしかの計算で出ている
のか。最初の解析、分かっているからやらなかったというのではなくて、炉内
の燃料はこういうふうに分かると、そういうソフトがあるのなら使うの
が当たり前で、原安委も保安院も問題ないと思って言うのは、世界的にも信
じられないと思うことだが。

A：推測することしかなかった。いずれにしても冷却するということ。

Q：事故直後に提出させる必要のものだったのではないのか。

A：そのデータよく見えないが、当日から手に入っていたら、それにしたこと
がないが、出来なかったのこういう苦労したということ。

Q：見解のとりにまとめを保安院でするでしょうか、その上で考えさせていた
だきたい。

A：(保安院)福島第一、3、5号機バックチェック済。3号機はプルサーマル
関係でやっている。3号機は原安委に報告していない。地震計、東電稼働し
なかった件、他の電力会社にも同様な事象がないか文書で指示することにし
ている。

Q：所内電源、共用プール1階、2台あって、MC水没使用不可となっている
が、DGは使えたが、配電盤が水没で使用不可になったという理解でよいか。

A：DG地震が水没したのか、付属が水没が分からないが、メタクラが故障し
て動かなくなったということ。5、6号機の方も、DG冠水よりも、DGを
冷やす方が仕えなくなると言うこと。

Q：空冷式か。

A：空冷式。

Q：デジタルデータでもらった非常用開けたり閉めたり動いたりしていないと取りまとめでなっているが、前提と異なるが如何。
A：14：30に使えるなくなったとして暫定的に評価。チューニングしながら実解析に使って行く。

Q：非常用は動いていたか。
A：非常用は起動していた。

Q：中性子モニターが動いてないと言うことだが、核分裂は部分的に続いていることもありうるのでは。ハフニウムと一緒に入れた方がいいのでは。
A：中性子モニターは動作していないが、臨界の可能性派内。また、中性子の吸収はホウ素の方が大きいと思う。

Q：東京電力は、政府機関に対して、メルトダウンしたという根拠の情報を提出したことになるのか。

A：メルトダウンについて直接的でないが、CAMSのデータで損傷の程度を発生時に保安院に伝えている。原子炉の水位、-500cm以下であることがわかった、燃料が底部にあることを保安院に速やかに伝えている

Q：メルトダウンについては、解析結果、根拠となるものは受領されたということか。

A：保安院がメルトダウンと判断するには十分なデータとは言えない。

Q：メルトダウンは。

A：しているかどうか判断する根拠として不十分。

Q：まだメルトダウンしていると言っていない。

A：そういうこと。

Q：メルトダウンしている以外にも、上部にのこっている、水蒸気で冷やされていることも想定と言っていた。高圧で水蒸気何度でなるのか、現時点で、100から120℃ということだが、どうやって測定されているのか。冷温停止、熱湯を冷温で考える、専門的考え方での合理的な説明をお願いできない

いか。

A：(保安院) 今現在の状況、3ケタのものもあり、水の温度は、冷温停止、中の水100℃を下回るのが最初のステップ。健全な原子炉は、40とか50とかが安定した冷温の状態と思う。

Q：水蒸気。

A：だいたい100度。あまり圧力を上げてないから。100℃前後が60℃とか70度となれば、中の水が100℃を割ってきたのでないかと推定できる。

<東電からの本日の進捗情報について>

○東電

(司会) 明日、道筋の説明、開催、官邸で検討後あらためて報告、合同会見明後日の16：30から開催したい。具体的案内、アドレスにメールで連絡する。

19：13